

悠久の名作シリーズ(9)

『絶句(二二)』 杜甫

杜甫の心をとらえた景…とその情

江<sup>かわ</sup>あおく 白い鳥あそぶ

山はみどり花<sup>はな</sup>紅にもえる

この春も又 過ぎんとし

ふるさとを見るはいつの日か

漢詩には教訓詩や送別詩などいろいろな内容の詩にふれ

ることができるが、一般的には歴史事実をありのまま述べるしるした「叙事詩」、見たままの景色のみを書き記す「叙景詩」、それと感情を述べ表わした「叙情詩」とに大別される。そうしてみるとこの詩は「景」と「情」とで構成された詩といえよう。

前半二句はなすすべもない旅人である杜甫の眼前を通り過ぎてゆこうとする春景色。転句の「又」の一字は、そうした悲しみが今年の春ばかりでなく、昨年も一昨年も又、その前の年も同様に繰り返されてきたものであったことを示している。この転句は前半の叙景から結句の望郷の念を述べる叙情への橋渡しの役を果たしているといえよう。江山の自然を描写しつつ、もだしがたい望郷



絶句 杜甫

江碧鳥逾白  
山青花欲然  
今春看又過  
何日是歸

の情を詠った「絶句」と題する名作といえよう。前半二句の碧・白・青・然あかなど色彩豊かな景色を、現在なら写真に撮っておこうというようなものであるが、それでは時間や事物の変化を汲みとることができない。情景を描きながらも、その真意は情景の奥にあるものという点にある。悲愁に充ちた杜甫の「魂の叫び」までは写し撮ることはできない。

憂愁の詩人「杜甫一生愁」：その人生

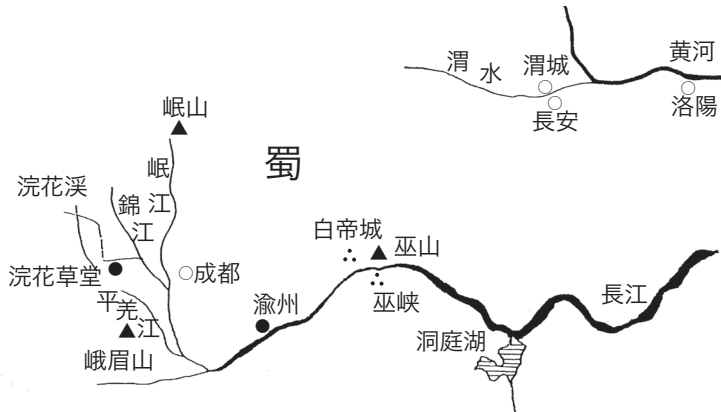
杜甫は詩の世界における聖人、「詩聖」と呼ばれた。

中国において儒教における聖人、孔子の教えを忠実に見つけた詩人であったといえよう。代々地方長官を務めるほどの家に生まれた杜甫は、子供の頃から経書に耽ることが多かったことも影響したといえよう。杜甫はのちの乱れた社会にあっても年少の頃から培った精神を放棄しようとはしなかった。頑かたな姿勢が杜甫詩を支える魅力の源といえる。戦争を憎み民衆を慈しんだ杜甫の愁いは、いつ終わるともなく続いた。それでも生涯理想と現実の矛盾から目を背けることなく憂い続けた杜甫。戦乱の最中に妻子を抱えて各地を彷徨さまよい歩き、困窮・孤独・病氣と、生涯の大半は不幸と生活難にとりつかれた不遇の人生を送った大詩人といっても過言ではない。

その一生を通じて人間の悲哀を詠い続けた杜甫の詩は、

一字一字に血の滲む苦心が偲しのばれ、その詩風は「杜甫一生愁う」と評された。憂愁の詩人杜甫、大暦五年、五十九歳にして洞庭湖に近い湘江しょうこうに浮かべた舟の上で苦勞に満ちたその一生を終えた。

### 束の間の安らぎ



この詩は広徳二年（七六四）杜甫五十三歳の春の作である。

浣花草堂…成都より西へ4km程離れた浣花溪のそばにたてられたところから名づけた庵で杜甫が数年間生活した所  
浣花溪…長江の支流、岷江の分流である錦江の支流

る。題の「絶句」というのは近体詩における四句詩の呼び方をそのまま題名にしたもので、(一) というのは二首連作の中の第二首目の作品である。杜甫の「絶句」と題する詩はとりわけ多く有り、因みに「兩箇の黄鸝翠柳に鳴き」の「絶句」と題する詩

は、この詩と製作時期の比較的近いときに詠まれた四首連作の第三首目の作品である。この詩が詠まれた場所は四川省の成都の南を流れる錦江であろう。成都の町は錦官城と呼ばれ、三国時代蜀の劉備玄徳に仕えた諸葛孔明を祀った社のあるところでもある。(B14号蜀相) 言い伝えによれば、錦織をその江水で洗えば色がより鮮やかになるので「錦江」と名付けたという。安祿山の叛乱にあつて長安を離れ、険しい蜀の棧道を越えこの町に辿りついたのは乾元二年（七五九）の冬であった。杜甫一家はほどなく錦江の支流である浣花溪かんかけいという川の側に荒地を見つけ新居を建てることとした。一家は自分たちの手で土地を切り拓き、木の根を掘り起こすなどの重労働もするなどして、数ヶ月かけて茅屋は完成した。当然杜甫では費用を負担できるはずも無く、母方の親戚や成都の長官であった裴冕はいべん、又洛陽在往時からの友人高適など多くの知人からも援助をうけた。浣花草堂と名付けた庵での数年間のわずかな生活であったが、不遇といわれた杜甫の人生において、それはしばしの安らぎを得た時期であつたといえよう。

### 鑑賞と研究―詩を際立たせる構成

今に伝わる杜甫の詩はおよそ千四百七十首あるが、三十歳ぐらいまでの若い頃の詩は僅か二十首ぐらいしか残されていない。どういう理由でかは知りえないが

杜甫は青年期の作品を残そうとはしなかった。晩年に詠まれた有名なこの詩はさすがに構成が際立って優れ、中国国民に最も親しまれた。前半は江、鳥、山、花といった四つの景物に、それぞれ碧、白、青、紅の四色を添え、対句を巧みに用いて鮮やかな春の色彩の世界を描き出している。再びめぐってきた美しい春景色にいながら、いたずらに時間のみが過ぎて老年に近づくのを感じさせられる。そして自分は一体いつになったら故郷へ帰ることが出来るのだろうかという不安の中でエンディングを迎える。「今春看又過ぐ」という句は季節が目の前に推移しつつあるのに、それをとどめておくことができないという空しさを漂わせている。五十代に入り身体の衰弱に悩む杜甫にとって二度と戻ってこないものであったのだ。たとえ来年また巡ってくるとしても、既に「今



浣花草堂あたり

春」ではない。「何日是帰年」、一度失った官吏としての地位を再び得るためにはまず長安に帰らねばならぬ。寄る辺をなくした杜甫は小舟をこしらえて成都を離れたが、願いは叶えられることなくその終焉は長安でも故郷の河南省鞏県でもなかった。